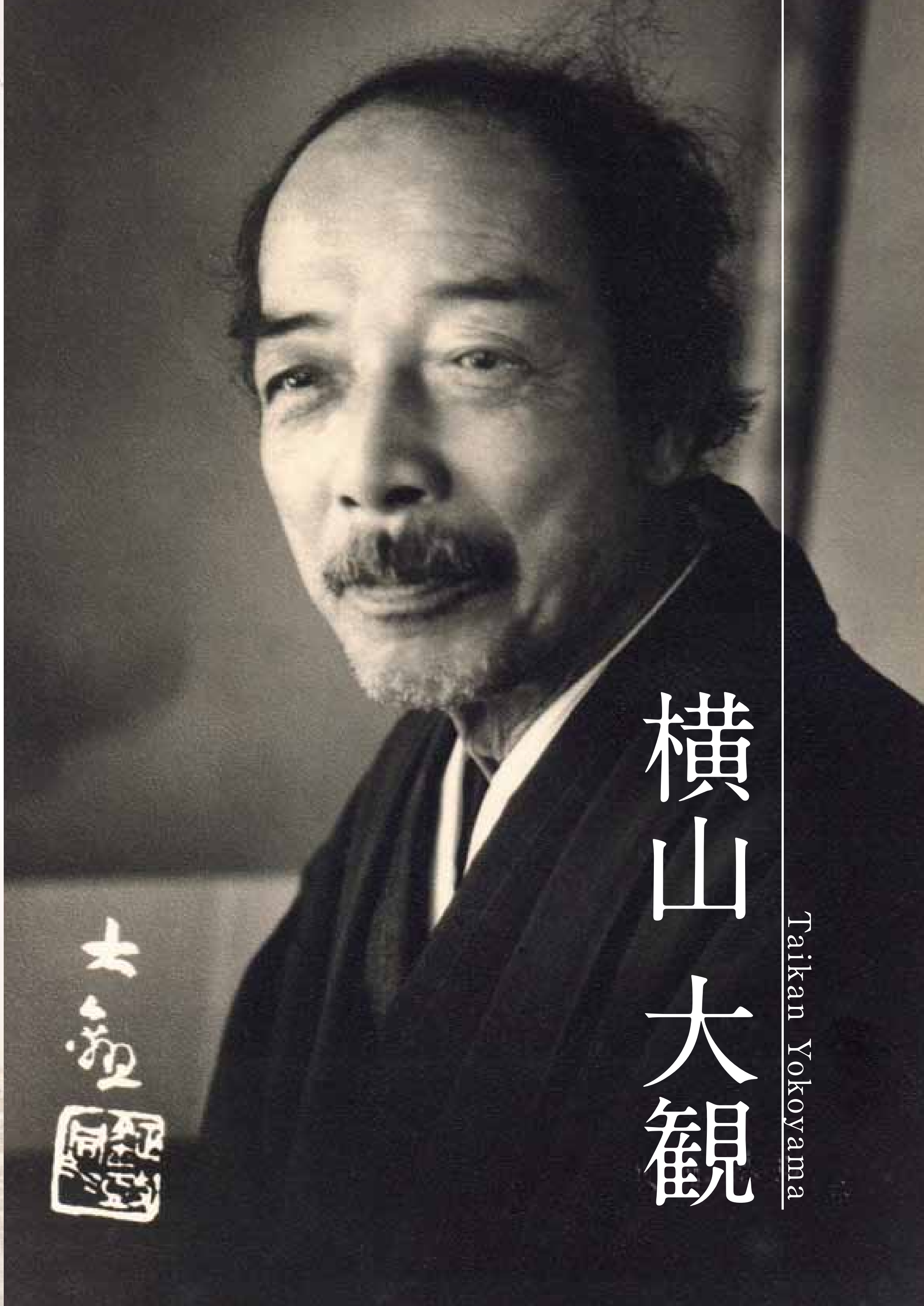


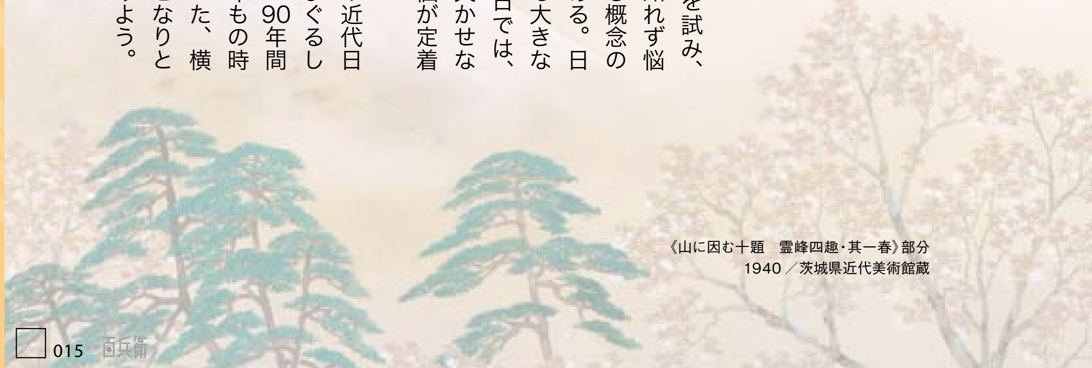
横山 大観
Taikan Yokoyama

江戸時代から明治時代へ。その激動の時代を生き抜き、近代日本美術に新たな道を開く。

江戸時代に約200年間続いていた鎖国体制から、黒船来航を機に開国へと方向転換、そして1868（明治元）年には幕府が崩壊し、明治維新により新政府が成立した。日本で政治的、経済的、そして社会的大変革が起こったのだ。薩摩・長州両藩出身の官僚層を中心とした急進的な近代化政策によって、異文化という波が日本列島に流入した。様々な文化が入り混じった、まさに激動の時代だったのである。この頃、日本の美術界でも、西洋美術というこれまで知ることのできなかった新しい表現方法が登場し、大きく揺れ動くことに。西欧との交流が本格化すると、色彩で輪郭や遠近感を表現する油彩画を描く画家が急増し、フランスやイタリアなどへ渡る画家も少なくなかった。海外の芸術文化を積極的に取り込むことで、日本の洋画は大きな発展を遂げたのである。

横山大観は、まさにこの激しく移り変わる時代に生まれ、混沌の中を歩んだ画家だ。彼は止めどなく流れ込む異文化を無抵抗に受け入れるのではなく、日本の伝統と西洋の融合を試み、自ら試行錯誤して、人知れず悩みながら日本画に対する概念の再確立を目指したのである。日本だけでなく、世界にも大きな影響を与えた大観。今日では、近代日本美術を語るに欠かせない存在であるという評価が定着している。

明治、大正、昭和……近代日本と呼ばれる、この目まぐるしく変化していった時代。90年間の生涯の中でおよそ70年もの時間を画家として生き抜いた、横山大観という画家の人となりとその画業を振り返ってみよう。



《山に因む十題　霊峰四趣・其一春》部分
1940／茨城県近代美術館蔵